

第七詩集 ラストエンジェル

一条の虹

全てをリセットした
透明な朝の 대기
朝食のテーブルには
白に還元された記憶
盛られた忘却
旅立ちの時はいつも
真っ白な画用紙
そして差し込む
一条の虹を待つ
至福の時間

ファティマの記憶

ラストエンジェル降臨の奇跡
ふくよかな胸つややかな唇
誰もが夢想する五月の馥郁
時計の針は激しく逆回転し
ブラッドリの回転木馬に跨ったように
突然風は逆巻き花びらを散らし
蝶は群舞し未来は吸い込まれる
過去へのブラックホールへ
私は深海魚のように身を委ねる
ラストエンジェル、君は
子どもと大人の間を往来する
無邪気な妖精だ何もかも
君に捧げよう美しい未来も
全人類への愛さえも
君一人に捧げるのが嬉しい
ラストエンジェル光臨のときがきた
神秘なるファティマの記憶

秘密の蝶道

夏の木漏れ陽に光る水を蝶が飲みに来る
蝶道はそんな駅を持つ道
遂に見つけた私の蝶道
ラストエンジェルもそっと水に引かれてくる
私は大きな捕虫網を掲げた少年の頃から
木陰でじっと君を待つ
でも何時間、何日、何年、
まして何十年たっても捕まえられない
透明なラストエンジェル
君はすり抜ける
夢から夢へと逃げる蝶
そうして何十年も経ってしまった
でも遂に捕まえられる時が来た
君は私のラストエンジェル

さやかな風にふかれて
遠いところに行っていた私の魂が
私の肉体に戻ってきた
さやかな風に心地よく吹かれている
ラストエンジェル何年も
過ぎてしまったよ君に逢うまで私は
何をしていたんだ
確かに世界中を巡り
世界は手中にしたつもりだったが
その私はいま君の掌の中にいる
ラストエンジェル全ては
君に贈られる
きつとクレオパトラも
そんな才能を与えられていたのだろう
時空を超えて君は存在する
しばらくは私の近くにとどまっていたほしい
一緒にさやかな風に吹かれていよう

繊細なその鱗翅を震わせて
君はしばしまどろむ

南風を待つ大陸

氷は美しい

色とりどりの光を屈折させて

何というイルミネーション

吐息はきらきらと凍り落ちる

北国の冬は厳しいけれど楽しい

やがて来る南風の予感

天使の胸に胎児のように宿り

薔薇の目眩めく香りに埋もれる

春を夢見るそんな夜の

草原をイメージすると

海も押し寄せる

太陽は燃え上がり

砂漠は焦げ付く

いきなり真夏だ

君の唇を想像する

いけない妄想

天国の駅は近いもうすぐだ

世界は夜夜

日食？暗くして

見えないその手

何やら柔らかな

二つの突起物が

僕に迫る嗚呼

高なる鼓動

燃える血潮

死んだっていい

と叫んだら覚醒した

世界は夜夜

甘やかなその芳香

香りは夢ではない
とするとラストエンジェル？
いつ天へ帰ったのかな

春がドアの外で

春がドアの外で今夜朝を待っています
風が歌を唄いなぜか彩られた夜です
明日が来たら僕はあなたを迎えに
光の中へと出発します
春の訪れを
あなたに告げるために

ドアを叩く天使の翼が
ドアに触れる天使の羽が
早く早くと急かすように
僕には聞こえる気もそぞろ
けれど朝まで焦らすように
僕はじっと待っている、でも
朝が来たらあなたはいない
いつもわかっているのに

春、悦楽の天使

すべての春は
薔薇のかほりとさやかな風と妖めく光と
快楽の夢の中にある
種族が連綿と保存されるために
すべての春の中にある
あの世とこの世との垣根を払い
往来する天使よ
あなたの眼差しは麻薬のように前脳を痺れさせ
あなたの息つかいは子守唄の様に聞こえる
ラストエンジェル悦楽の天使よ
春がずっと続けばいいと希う

官能の独り酔い

前触れもなく

そう何の前触れもなくあなたは来た
私が20歳の時もそうだった
時空の隙間から迷い込んだ蝶のように
私の心の中に入って来た
そしていつの間にか抜けだして
三次元ホログラムのように
あなたは現実の少女になっていた
私が幾度も幾度も夢に見た
原宿と渋谷のあいだの土手から手を振った
あれはまたあなただったかもしれない
そして40年

甦った少女伝説

きつとあなたはラストエンジェル
水を飲んだら幻になってもいいよ
私も一緒に幻となろう
そうしていつまでも一緒に
人は生まれ死ぬ
ほんの一瞬輝いて
天空の神の様な光を発し
記憶として生きる
ただそれだけ
だから愛しいラストエンジェル

(挿入歌)

ある水色の朝
僕の白い部屋に
一羽の白い蝶が
迷い込んでいた
窓を開けたこともないのに
どこから入って来たのだろう

風の吹く宇宙へゆこう

コスモスの咲き乱れるコスモ

真空の風の吹く宇宙

船の窓にあなたがいる

黒い瞳と赤い唇

吸い込まれるように

私は乗船すると

船にあなたははいない

すれ違った宇宙船に

手を振るあなたがいた

翅があるなら飛んで来い

僕と一緒に風の吹く

漆黒の宇宙に行こう

そしてその果てに

何があるか探しに行こう

春の予感

木々は春に芽吹くが

人は芽吹かない

老いて死ぬだけだ

けれど心で

春を迎える

高等動物である

ヒトに与えられた

脳みその奇蹟だ

甘やかな秘めやかな

夢の時間を楽しむ

天国に一番近い時間だ

臨死体験とは

このようなものだろう

保存していたビデオのように

セピア色でもいい
ラストエンジェルの運ぶ
春の予感の馥郁
死後の花畑

おらは死んじまったダ
ではないが人はみな死ぬ
200年も生きている人間はいない
だが記憶は残る

あるいは記憶に残りたい
しかし信じられるか

少女との恋なんて
ピカンにもあった
恋は精神的と肉体的の絶妙のバランス
でもそんなことがあるのか

いつの時代も花畑は死ぬ前にも見られる
本当の春ではないが春の光
あらゆる蝶は乱舞しないが少しは来る
慎ましやかなよい香りもする
少女も少しは興奮する

だが私は冷静を装う
と

いつしか二人は帆船の上にいる
これで世界を旅しよう
私が死んだら海に葬っておくれ
ラストエンジェル愛しい君は
新しい船を捜せばいい

そのころ私は死後の花園から永遠に君を見ているから

世界に果てはない

風の吹くマジックガーデンから桃色の誘惑
何がどうなって君は降臨したのだろう
清香（さやか）な寝息の果てに

世界は夢に囚われている
海はソラリスのように確かに生命体だ
寄せては返す時空の刻み
夜景は海蛍の呼吸
何でこんなゆるやかな時間
ああ世界が止まった
薔薇の香る夜
全ての生命のまどろみ
朝は永遠に來ない
世界に果てもない
ぐるぐる回る時計の針だけが
そんな事象を証明する
そうだ君という限り
世界に果てはない
メビウスの輪のように

逆暦（さかごよみ）

考えてみれば
秋の紅葉は死に際の花盛り
臨死体験みたいなものだ
結局は死ぬけど
華やかな
景色を楽しませるような
春夏秋「春」冬
の二回目の春だ
というふうに考えると
いろいろ納得が行く
どうもいつか紫の海と
真っ赤な紅葉の
風景を見たようだ
脳のどこかにこびりついている
あれは南半球だったような気がする
星座は真逆になる
だから暦も一寸逆にしよう

すると時間も遡る
あの紅葉はどこで見たか
もしかしたら豪州の首都だ
水もあつた森も深い
あの夢はあそこだったか
紫の湖か海か
真つ赤な紅葉が燃焼する春のような秋
それは恰も天国の景観
遺伝子に組み込まれた景色か
なぜか懐かしい

冬の紫陽花

氷の花とプリズムの光
ハルビンの深呼吸できない寒気のように
色取り取りの宝石が結晶する
恰も冬の紫陽花
すべてはラストエンジェル
おまえに似合う装飾品だ
生きている花も
ドライフラワーも
冬の紫陽花の美しさには
叶わないだろう
その冷たい美しさこそ
おまえに似つかわしい
遠い日雪の中に見た
白い女の笑み
胎児は雪に埋もれて
白い夜の底に泣く

私もいつか埋もれよう
冷たい子宮に還る日が
もう近いのかも知れない
頷く冬の紫陽花

雪解け待ちの国

氷漬けの山脈春は遠い
里はせめて春よ来い
それがなかなかなのだ
北国の冬は長い春は遅い
煌めく木々の枝雪に
日差しの変わりを感じるのが
精一杯の期待
でもいつか春は来る
死ぬ前に来るといいね
天使の羽ばたく春
見ると死期が来る
死にたくないから冬のままでもいい
春など来ない方が長く生きられる
そう言い聞かす自虐的な朝
日差しは白い吐息を見せて
雪解け待ちだが決して解けない雪
絶対来ない春
天使の予感
それでいいそれで
そんな国に住んでいるのが安心
いつまでも雪解け待ちの国に
住んでいたい永く

今年も桜桜

桜満開は生の証

若い時は紙屑に見えた桜が
だんだん花に見えてきた
おまえはそんなに虚無的になるなど

毎年毎年執拗な程に咲いてくれたね
春が来るたびに一つ一つ

この世の夢を語るように

桜満開の大都会

楽園はここにあると言わんばかりに

短い主張儂い時限

桜は一切香らず空気の如くに

あるいは一瞬の春の風

しかも桜が去ると時節は早回し

重たい花花が次々と咲き

木木は芽吹き雨は降る

真夏の鬱陶しい陽光の到来まで

瞬く間もない

そんな短い季節も

年巡りの生の証

また一年生きたね

桜が言ってくれた